

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

所 属 保健医療学部看護学科
名 前 碓井 瑠衣
作成日 2025 年 5 月 29 日

1. 教育の責任

湘南医療大学は、ふれあいグループの基本理念である「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」を建学の理念として掲げている。この理念は大学のみならず、グループ全体が社会に奉仕し、すべての人々の幸福に寄与することを目的としたものである。私たち教員は、この理念の実現を教育を通じて果たしていくという責任を自覚し、日々の教育活動に取り組んでいる。

これまでに担当した科目、および本年度に担当している科目は以下のとおりである。

【保健医療学部 看護学科】

ナーシングスキルⅠ・Ⅱ、ヘルスアセスメントⅠ、ナーシングプロセスⅠ、現代医療論、チーム医療論Ⅰ、地域看護方法論、プロフェッショナル論Ⅰ・Ⅲ、看護基盤実習Ⅰ・Ⅱ、統合実習

【大学院 保健医療学研究科 保健医療学専攻】

感染看護学特論Ⅱ、健康増進・予防特別研究

【大学院 保健医療学研究科 保健医療学専攻 博士課程】

地域生活ケアシステム学特論

その他として取り組んでいる教育活動は下記の通りである。

- ◆ 2学年のチューター
- ◆ 学生支援委員会委員
- ◆ 大学際担当

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私の教育理念は、「異文化理解」の重要性を学生に伝えることであり、「異文化を理解しようとする姿勢をもって看護を提供すること」の大切さを教育の中で共有していきたいと考えている。

「異文化」という言葉からは、しばしば外国や海外を連想しがちであるが、実際には私たちの身近にも異文化は存在している。「文化」とは、人間が自然や風土との関わりの中で築いてきた生活様式、価値観、行動様式などの総体であり、すべての人が自身の文化を背景に生きている。そして、自分とは異なる文化に触れたときに、違和感や戸惑いを覚えるのは自然な反応である。重要なのは、そうした感情に気づきつつも、相手を理解しようとする姿勢を持つことである。

看護とは、対象者の生活に寄り添い、より健康な生活の実現を支援する営みである。対象者の生活は一人ひとり異なるため、看護実践には常に異文化理解の視点が求められる。相手を「異文化」として受け止め、自分自身の常識や価値観を押しつけないこと——この姿勢を、私は教育を通じて学生に伝えていきたいと考えている。

2) 理念をもつに至った背景

この理念を持つに至った背景には、私自身の看護学生時代の経験がある。大学進学を機に、生まれ育った地元を離れて初めて暮らす地域では、日々の生活において、慣習、方言、文化的行事、地域の営みなど、今まで知らなかった多様な文化に触れる機会が多くあった。それらは私にとって「異文化」とも言える新鮮な体験であり、当初は戸惑いや驚きの連続であった。同じ日本においても、これほど多様な文化が存在していることを知り、自分が当たり前だと思っていた価値観が、実は限られた環境によるものだったと痛感した。この原体験は、その後、さまざまな地域や人々と関わる際の基盤となり、異文化に対して柔軟な視点を持つ大切さを私に教えてくれた。看護師として、また教員としても、対象の文化的背景を尊重し、理解しようとする姿勢は不可欠であると考えようになった。学生にもその重要性を伝え、実践につなげてほしいと願っている。

3. 教育の方法・戦略

私は2024年9月に本学に着任したため、現在のところ担当授業の数は限られている。しかし、今後の教育活動を見据え、私自身が目指す教育方法・戦略についてここで述べたい。

看護教育において、私が特に意識しているのは、「虫の目」「鳥の目」「魚の目」の三つの視点を持って授業に取り組むことである。これらの視点は、教員としての私自身にも、学ぶ学生にも必要な視点であり、多角的な視野で看護を捉える力を育てる基盤となる。

「虫の目」とは、複眼的な視点を持ち、一つの事象を多角的に捉えることを意味する。看護は明確な「正解」が常に存在する分野ではなく、多様な解釈や対応が求められる。学生には、対象者の立場、状況、価値観の違いなど様々な要素を考慮しながら、物事を多面的に捉える姿勢を身につけてほしいと考えている。また、「虫の目」は物事を細部まで丁寧に観察する姿勢も表しており、関心を持ったテーマについて自ら掘り下げ、主体的に学ぶ力の育成にもつながる。

「鳥の目」は、俯瞰的視野を意味し、学びの全体像や位置づけを把握する力である。学生が現在学んでいる内容が、カリキュラム全体のどの位置にあるのか、また将来的にどのように臨床実践に活かされるのかを意識できるよう、授業設計の中で学びの目的や背景を明示するよう努めたい。

「魚の目」は、水中の流れを読むように、社会の変化や時代の流れを敏感に捉える視点である。看護の知識や技術は時代とともに変化するため、教科書に書かれている情報が常に最新であるとは限らない。医療・福祉・社会の動向を踏まえて、現場の実際に即した教育を行うために、日々アンテナを張り巡らせておく必要がある。これらの教育方針を具体化するため、以下のような方法を検討している：

- 複眼的視点を養うため、グループワークやディスカッションを取り入れ、他者の意見に触れる機会を設ける
- 学生自身が関心を持ったトピックについて調査・発表を行う場を設け、主体的学習を促す
- 現場の動向を反映した事例を取り上げ、理論と実践の接続を意識づける
- 教育技術・看護実践の両面において自己研鑽を継続し、学会参加や文献調査を行っている

このように、多面的な視点を基盤に、学生とともに学び続ける姿勢を大切にしながら、教育に取り組んでいきたい。

4. 学習成果

1年生および2年生を対象とした基礎看護学の演習においては、代表教員によるデモンストレーションを見るだけでなく、学生自身が看護技術を相互に実践する機会を設けている。これにより、患者役となった学生が実際にその技術を受けることで、「対象者の気持ち」を体感し、理解を深めるきっかけとなっている。限られた演習時間ではあるが、この体験を通じて看護技術への関心や、対象者への配慮の重要性に気づく学生も多く、一定の学習効果が得られていると考えている。

5. 改善のための努力

講義中、学生の集中力が切れてしまっていると感じることがあり、90分間興味を持って参加できる講義方法の工夫が必要であると考えている。改善策として、学生に問いかけて発表を促す、クイズ形式を取り入れる、講義の導入にアイスブレイクを用いるなど、参加型の要素を加えることで集中力を維持できるよう取り組んでいきたい。

6. 今後の目標

短期的な目標としては、2025年度内に参加型の講義手法（問いかけやクイズの導入、アイスブレイクなど）を2～3科目で試行し、学生の反応を踏まえて改善していきたい。長期的には、看護教育において「虫の目」「鳥の目」「魚の目」の視点をより効果的に授業に取り入れ、学生が多角的に物事を捉え、柔軟に考える力を育てるよう、教育方法の工夫や教材開発を継続して行っていきたい。

【添付資料】

湘南医療大学保健医療学部看護学科 2025年度シラバス

湘南医療大学大学院保健医療学研究科保健医療学専攻 修士課程 2025年度シラバス

湘南医療大学大学院保健医療学研究科保健医療学専攻 博士後期課程 2025年度シラバス